Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

033

子どもの感性の発見ー創造的生活の中でー

（その1） MUSIC MAKING その後

○丹羽輝子　堤加寿美　坂井衣子　北村祐子　茂森宏子　荒牧富士子
（東洋英和幼稚園）（同）　（同）　（同）　（同）　（東洋英和短大）

はじめに

私達幼稚園に於ける、創造活動の一環として、MUSIC MAKINGの実践報告を保育学会に発表してから12年が経過した。その活動は、東洋英和短大芝教授の理論の実践と共に現在も子供達の生活の中に、少しづつ変化しながらも活発に息づいている。園の年間目標の中の「創造的な生活態度を身につけるようにする。」という項目は同じであるが、幾つかある小項目「自分で考えて行動する。」「喜んで人と協力する。」等の他に「すべての事象に興味や関心を持つようにする。」「そなえられた感性を高め、それを充分に表現するように導く。」という項目が加わっている。何となく行われていた活動も、今では1人1人の子どもの中にある五感はどの様な刺激を受けると感覚をひきおこされるのであろうか、という意識を持って思考錯誤しながら進められている。今回はその様な実践を再び音楽リズムの面から取りあげてみた。

○環境の変化

12年の時の流れは園をとりまく物理的面でも多くの変化をきたしている。人も車も少なく静かな住宅街が、若者の町として新しいビルの建築とそれに伴う若者嗜好の店舗の増加、高速道路の設置等により騒音の町と化し園にせまってくる。それだけに緑に囲まれた土の香りの高い園庭や、小動物の集まる水場は、子どもの中にある感性をひき起こす大切な生活の場となっている。女子60名男子約25名の園児達は、組別には別かれているが、全体入りまじっての自発的活動を中心とした毎日を過ごしている。自由な心の状態での、心をゆさぶる様な体験そこから溢れ出る感動、そして次々とくり広げられる表現の世界、それを求めて生活の輪は拡大していく。手軽に出かけた品川車庫・工場等の見学も社会情勢の変化から中止せざるを得なくなり、機械の動く様子を見たり音を聞いたりするチャンスが少なくなった。その代りに市内バス・地下鉄などを用いて織物展(1983年)菓子の博覧会(1983年)リトグラフ展(1985年)水族館(常時)そして父親との共感の体験として九十九里浜(1981年)静岡いちご園(1982年以後隔年)へと行動の範囲は広まっていった。そこでの体験は大きな感動と共に音づくりの活動となって広まる。この様に音づくりの活動は園の生活にしっかり定着し子供達は自然な活動として楽しんでいる。手づくり楽器を主とした音づくりの活動は擬音から、特殊な楽器を使用した事をきっかけに抽象的な音へと発展し、いわゆる教育用の楽器の他に素ぼくな民族楽器（アンクロン・ポンリン・チーンチャップ・カリンバ・竹笛・尺八・ささら・鳴子等）へと種類も増えている。子供達はそれらを自発的活動や音楽リズムの活動の中で充分に利用している。これは、4才児の音づくりの実践である。

○音づくり

I　晴れの日の音づくり（自発的活動と平行しての活動）6月30日(木)晴れ　対象4才児10名

子どもの実態

(1)基本的リズム（歩く、走る、スキップ、ギャロップ、つま先歩き）は今迄に何回か体験しているが、スキップのできない子どももまだいる。

(2)体を動かす事が好きである。

(3)楽器は4月から自発的活動の中で自由に触れて音を試しながら、「雷の音みたいね」とか「雨の音みたい」と感じた事を話し合っている。又、音を出しては「先生何ていったかわかる？」と聞いたりしている。楽器は短大生の手づくり品・太鼓・金管・鉄琴がコーナーにおいてある。

(4)「雨の音」をスティックとマラカスで表現した事がある。

(5)年長組自作自演の紙芝居「ぐりとぐら」や母親による劇「白雪姫」をみた。

(6)音に対して興味を持っている子どもが多く、音あてゲームをしたりしている。

(7)皆で気持ちの良い日には、園舎の周囲や園庭を散歩し、咲き乱れる花や植物に触れたり探索をしている。

展開A(1)そんなある日「晴れの日ってどんな感じ？」「どんな様子？」という教師の問いに対し、子ども達から「ポカポカしている」「鳥が飛んでいる」「風が吹いている」「お日様が笑っている」「汗をかくよ」「葉っぱが青い」という答が出た。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

(ロ)「それは音にしたらどんな音になるかしら」という問いかけに、各々自分で音をいろいろ試しながら、これと思う楽器を選び、創りはじめる。
(ハ)1人ずつ自分で選んだ楽器で各自の感じを表現したり、友達の音もききあう。
(ニ)どう表現するか決まらない子どもが2名おり、「～ちゃんと一緒でいい」という。園児が感じをつかめる様に、散歩の情景や庭の様子について保育者が助言する事によって最終的には自分で決める事ができ、子どもの晴れはれとした表情をみる。

Ⅱ春の音づくり　3月6日(火)　晴　　対象 4才児 27名

子どもの実態

(イ)庭にでて自然の変化（氷が溶けた、木の芽の芽生えがある、暖かい、気持ちがよい、等から春が近づいている事を感じている。
(ロ)3学期にはいり、子ども達は年長組になる喜びを感じている。
(ハ)音づくり・劇遊びなどが好きである。11月に音をつけながら、手ぶくろの劇遊びをする。
(ニ)年長児とよく交わって遊んでいる。年少児の計画した年長児とのお別れ会も終り、やがて年長児は1年生になる事を知っている。
(ホ)春の音さがしに興味をもっている。

A(イ)春の音について話し合いがはじまる。
(ロ)子どもの感じていた事「木の葉がゆれている」「もうすぐ春ですよと風が言っている」「動物達の起きる音がしている」「小鳥が生まれる音がする」「小鳥が木の実を食べている」「お日様がキラキラ輝いている」
(ハ)何の音を表現するか決め、楽器を自由に選ぶ。
(ニ)同じものを表現する子ども同志は近くにすわる。(そろそろグループで表現する方向へと向っていく。)
(ホ)1人1人音を出し、皆で聞く。

B春の音づくり　3月9日(金)晴　対象 4才児 30名

(イ)春の音をつくる事を保育者から話し、好きな楽器を選ぶ。
(ロ)楽器の種類ごとに順番に座り、保育者は1人1人何の音を表現しているかを皆に紹介しお互にききあう。
(ハ)「春」（大中寅二作曲）のピアノにあわせる。最初ピアノは小さい音で子供の音にあわせてみる。次に子どもはピアノだけを聞く。最後に両方で気持ちよくあわせてみる。

C(イ)卒業式のお別れのことばの後に皆で「春の音」を演奏することにする。
(ロ)楽器を自由に選ぶ。
(ハ)保育者の助言でキンダーハープの即興演奏（感じるままに奏する）で始める事にする。
(ニ)キンダーハープが終るとピアノ曲がはいる。
(ホ)ピアノの音をききながら手づくり楽器と鳩笛が自由に子どもの思うままに演奏される。
(ヘ)ピアノが止まり金管が鳴ると、子どもの判断で自然にボンゴがはいる。
(ト)それが終ると再びピアノの演奏がはじまり、子ども達の手づくり楽器の演奏となる。
(チ)水笛は子どもがいれたい時に自由にいれる。
(リ)(ト)の演奏が終るとフィンガーベルがはいり、静かに自然にその音は消えていく。　　（資料別紙）

○まとめ

以上4才児の活動から

・個々の表現から始まり、グループへと移行するし、又発展する。
・まず自分で考え、それを表現する事から、人の話しを聞き協力する方向へと移行する。
・保育者はまず子どもの意見を聞き表現させ、必要に応じて助言をする。
・子どもが表現する事をきめ、次に楽器を選ぶ。
・子どもが楽器を決めてから、表現することを考える。
・同じ楽器でも、異ったものを異った方法で表現する。
・保育者の助言に依り、子どもは刺激を受けるが、刺激を受けない場合でも、仲間の意見を聞く事によって刺激を受ける事があり、そこにグループでの話し合いの意味が含まれている。これらの方法は子どもの感覚を刺激することに役立ったと思われる。

おわりに　　音づくりの活動は、特に子どもの感性によって創造できる音楽活動ではないかと考えられる。これらの事を通して考えられる事は、現在の子ども達は感覚が鈍いと言われているけれども、感動する時を与え、物に対する関心を高め、まわりの環境によって感覚を刺激する事により、感性は生まれるのではないであろうか、そして感性を育てる事は、幼児期にとって大切な活動の一つであると考える。音をつくる事によって子どもの感性を発見したが、これは音楽活動のみでなく、他の分野でも充分にその事がいえるのではないかと思われる。そして、他の分野の中でも宗教的な活動は、特に関係が深いものと思われる。

NII-Electronic Library Service